

論文の要旨

本論文は、『萬葉集』に収められた柿本人麻呂歌について、主に漢籍受容の観点から文字表現を考察し、その具体相に迫ると同時に、人麻呂歌の表現を継承する大伴家持歌にも射程を広げ、その受容と展開の様相を論じるものである。全体は序論・結論を除いて三部八章で構成される。

第一部「人麻呂雑歌における漢籍の受容」では、人麻呂の雑歌のうち「近江荒都歌」と「吉野讚歌」とを取り上げる。近江大津宮の荒廃を悼む「近江荒都歌」は『萬葉集』中の人麻呂歌の初出である。その冒頭は神武天皇以来の皇統を歌い上げることにはじまるが、第一章では、そこで神武天皇を「日知（ひじり）」と表現することに着目する。上代文献中の孤例である「日知（ひじり）」の文字表現は、文字通り「日」を「知」る者、すなわち天象を占い時を司る王という原義にもとづくものとして、漢語「聖」が「ヒジリ」と訓まれることと合わせて、「聖」と評される中国古代の王をも含意するとする。特に『日本書紀』神武天皇即位前紀に『尚書』「堯典」の直接的な引用が見られることなどを根拠に、人皇第一代の神武天皇と、『尚書』における第一代皇帝の堯とを重ねる理解があったことを推測し、「日知（ひじり）」という表現を用いることで、神武天皇に聖帝としての堯を重ね、皇統を讚歎するという人麻呂の表現意図を導く。

つづく第二章では、「近江荒都歌」にみられる「春草（はるくさ）」という表現を検討する。旧都の荒廃という人事の無常に対置される、めぐり生じる自然の象徴としての「春草（はるくさ）」については、詩語としての漢語「春草」を摂取したものと従来より指摘されていたが、人麻呂よりも後代の、李白や杜甫といった盛唐詩人の例が引かれることが多かった。本論文では、廢墟の景としての「春草」という詩語が確立するまでの過程を検証する。『楚辞』劉安「招隱士」を典拠として別離の悲しみを含意する「春草」と、荒廃の景に象徴的に植物を描く伝統とを受けて、隋代になって廢墟と草と春とを組み合わせた詩が現れ、初唐の懷古詩にいたって廢墟の景としての「春草」が成立したという道筋を描き出す。これによって、人麻呂が同時代の漢詩にみられる新しい表現をいち早く取り入れていた可能性が示されたことになる。

第三章では持統天皇の吉野離宮行幸に随従した際の作である「吉野讚歌」を取り上げる。「吉野讚歌」が長歌と短歌という歌群をふたつ組み合わせる二歌群構成をとることに着目し、その構成自体が南朝宋の鮑照による「侍宴覆舟山二首」を範としたものであることを想定する。鮑照の詩と当該歌が、天子の遊興の地への行幸という主題や表現のみならず、二部構成という構造や、叙述の順序、展開の面でも対応することを示した上で、両者がいずれも新帝即位を背景に作られた可能性を推測する。人麻呂の漢籍受容が詩句のレベルにとどまらないことを示す章である。

第二部「人麻呂挽歌における漢籍の受容」は、「日並皇子挽歌」と「高市皇子挽歌」、「石中死人歌」という三つの挽歌にみられる文字表現を対象とする。第四章では草壁皇子を悼む「日並皇子挽歌」にみられる「春花（はるはな）之」「望月（もちづき）乃」というふたつの枕詞について、新帝の威徳を讚歎する鮑照「中興歌」に「春花」と「三五」（満月）とが詠み込まれていることとの対応を見る。「春花（はるはな）」については、天子の治世を寿ぐ「中興歌」の「春花」を継承する一方で、満月については、「中興歌」を継承しつつも、仏典に例がみられる「望

月」という文字表記に改めることで、常住不変かつ完全円満なる仏のイメージをも含意させるという人麻呂の意図を推測する。

第五章は「高市皇子挽歌」において皇子の戦功を描く場面にみられる「掃（はらふ）」という文字表現について、漢籍史書からの受容を検討する。『史記』をはじめとする史書の戦闘描写にみられる敵を一掃する意の「掃」と、瞬時に掃討する譬喩としての「電掃」「風行」という表現から、当該歌の「掃（はらう）」という文字表現と、雷と風との譬喩表現が取り込まれたとする。さらに、それが大伴家持の歌に直接的に摂取されることを指摘しつつも、一方で家持が『晋書』にみられる新しい表現「掃平」をも取り入れて、「掃平（はらひたひらげ）」という独自表現を創出しているとする。

第六章は讃岐国の海辺で亡くなった無名の旅人を詠んだ「石中死人歌」をとりあげ、冒頭の国賞めの部分にみられる「天地（あめつち） 日月与共（ひつきとともに） 満将行（たりゆかむ）」に着目する。『周易』以来、天地や日月は天子とその政と深く関わるものとされることを受けて、当該表現にも天皇賞讃の意識を読み取った上で、それが「満（たる）」と表現されることで、皇統の永続性に対する祝意を含意したものとみる。

第三部「家持歌における人麻呂歌の継承」では、第一部、第二部と同様に人麻呂の表現を漢籍受容の面から跡づけた上で、それを継承する大伴家持の表現を検討する。

第七章ではふたたび人麻呂の「日並皇子挽歌」を取り上げ、枕詞「天水（あまつみづ）」に着目する。当該歌の「天水（あまつみづ） 仰而待（あふぎてまつ）」という表現は、人々が草壁皇子の治世を渴望する様子を早天に雨を待ち望む様子に譬えたものである。「天水」で雨を示す例は漢籍に未見ながらも、『大般涅槃經』に仏の教導を渴仰する「仰希天雨」という表現があることを指摘して、仏典の表現が発想の源になったことを推測し、仏に対する讃仰を皇子の治世への讃美に重ねたものとする。一方、家持の「安麻都美豆（あまつみづ） 安布藝豆曾麻都（あふぎてそまつ）」は、早天に実際の雨を祈る文脈で用いられているが、人麻呂歌の皇子讃歎の文脈を、当代の聖武天皇の恩沢への祈りとして含意させているとする。

第八章では、人麻呂「近江荒都歌」「日並皇子挽歌」と、家持「吉野儲作歌」とを比較することで、両者の皇統意識に差異を考察する。人麻呂の「近江荒都歌」は神武天皇から、「日並皇子挽歌」は天孫降臨から歌い出すのに対して、家持は、人麻呂に倣った皇統讃歎表現を用いながらも、常に天孫降臨から語り始めるという点で特徴的である。これは、天孫降臨時に先導をつとめた天忍日命を祖とする大伴氏としての意識を強く反映したものであり、そこに家持の臣下たる大伴氏としての誇りが読み取れるとする。

以上のように、本論文は、柿本人麻呂歌について、詩語、枕詞といった詩（うた）のことばの問題をはじめとして、構成、表現形式、さらには参照される漢籍の位相に到るまで、さまざまな視点から、人麻呂歌の漢籍受容の様相を描きだすものである。本論文の対象となった皇統讃美にもとづく公的な儀礼歌が人麻呂歌の神髄であると位置づけた上で、私的な作品の分析を今後の課題として、結びとしている。